

※『古今和歌集』の本文はテキスト（岩波文庫）によった。和歌の用例は、原則として勅撰集・私撰集は『新編国歌大観』に、私家集は『新編私家集大成』（共に、古典ライブラリー）を利用した。校異については漢字と仮名の異同は省いた。

折れる桜をよめる

つらゆき

58 たれしかもとめて折りつる春霞立ち隠すらん山のさくらを

【校異】

詞 ○よめる——みてよめる（雅家前穂私天）、よめる（伏）、もてよめる（六）、ナシ（筋元）

作 ○つらゆき——きつらゆき（筋）

【他出】

(1) 『古今和歌六帖』第六 山ざくら 4223

（山ざくらⅡ 4220）

（つらゆきⅡ 4221）

たれしかもとめてをりつるはるがすみたちかくすらん山のさくらを

(2) 『色葉和歌集』巻二 204

誰しかもとめてをりつる春霞立ちかくすらん山のさくらを

(3) 『歌林良材』上 323

貫之

誰しかもとめてをりつる春霞たちかくすらん山の桜を

【校訂】ナシ

【語釈】

○折れる桜——「折れる」の「折る」は手折る意。「る」は存続の助動詞「り」の連体形。手折つてある桜を見て詠んだ歌。

「片桐全評釈」は、具体的に「折つて瓶に挿してある桜」とする。『古今集』80 番歌詞書にも「をれるさくらのちりがたになれりけるを見てよめる」と手折つてある桜を詠んだ歌が残るが、桜以外に梅、菊などの花を手折る歌のほか、紅葉葉や榊の葉などの枝を手折った様を詠む歌も多い。

○つらゆき——紀貫之のこと。仮名序などに既出。『土左日記』の作者。『新撰和歌』を撰したほか、家集に『貫之集』がある。

なお、当該歌および次の59 番歌は『貫之集』に収められないが、こうした例は『古今集』入集歌には少なくなく、現存する『貫之集』諸本が『古今集』撰進後に、後の勅撰集の資料とするために作られたことを示唆する傾向といえる。

○たれしかも——「たれしかも」の「たれ」は「誰」、「し」は強意の副助詞、「か」は疑問の係助詞、「も」は詠嘆の係助詞。いったい誰がしたのだろうか。たれしかも初音きくらん時鳥またぬ山路にころつくさで（『拾遺愚草』上 1416）。

○とめて折りつる——「とめて」の「とむ」は下二段活用 of 動詞「尋む」で、探し求める意。「おくしにも色もかはらぬさかきばのかをやは人のとめてきつらむ」（『新古今和歌集』巻一九 神祇歌 1869 紀貫之）。「折りつる」の「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形。「たれしかも」の係助詞「か」を受けた係り結びで、二句切れとなる。

○春霞——「春霞」は春に立つ霞のこと。『古今集』以降、基本的に霞は春、霧が秋（秋霧）にそれぞれ立つものとして捉えられる。霞と霧とが似通ったものであるという認識は、平安時代中期にはすでにあり、例えば『安法法師集』67 番歌の短連歌に「たにのきり峯の霞のいとことか」「はると秋とはいもせ山かな」との掛け合いがあることからわかる。

○立ち隠すらん——「立ち隠す」は、霞や霧などが立って遮り見えない状態にする意。「やまざくらわが見にくれば春霞峰にもをにもたちかくしつ」（『古今和歌集』巻一 春歌上 51 読人不知）のような、山の桜を隠す詠みぶりは常套的なもの。また、「たがための錦なればか秋ぎりのさほの山辺をたちかくすらむ」（『古今和歌集』巻五 秋歌下 265 紀友則）など秋霧の用例も多い。「立ち隠すらん」の「らん」は、現在推量の助動詞。

○山のさくらを——「山のさくらを」の「を」は格助詞。初二句と倒置となる。『八代集抄』に「山の桜を、たれかもとめて折つる、霧の立かくし、いづこも見えまじきにと也。誰しかもは、誰か也」とある。「春霞立ちなへだてそ花ざかりみてだにあかぬ山のさくらを」（『拾遺和歌集』巻一 春 42 清原元輔）。

【通釈】

手折つてある桜を詠んだ（歌）

いったい誰が尋ね求めて手折ってしまったのだろうか。春霞が立って隠しているだろう、山の桜を。

【参考】

○当該貫之歌の影響——語釈「山のさくらを」の例歌としてあげた『拾遺集』42 番歌の元輔詠「春霞立ちなへだてそ花ざかりみてだにあかぬ山のさくらを」は、当該歌と同じ歌句を持つ点で注目に値する。貫之詠では春霞が隠しているであろう山の桜を思いやり、元輔詠では春霞に山の桜を隔てるなど求める点で詠みぶりは異なるが、根底に霞が桜を隠すという共通の趣向があることはいうまでもない。

この元輔詠は、『拾遺集』詞書によれば「天曆御時」の麗景殿女御の歌合、つまり村上天皇の治世における歌合によるものとされる。しかし、この麗景殿女御の歌合は他に資料がなく、類似する歌句を持つ『元輔集』Ⅱ 196 番歌「春霞たちなよりそうすくこき錦とみゆる山のさくらに」、『惠慶集』172 番歌「はるがすみたちながらこそうすくこくにしきにみゆるやまのさくらを」（元輔）は共に河原院の歌とする。歌の改作を行った可能性もあるものの、元々河原院における歌であった可能性も残る。

河原院では、惠慶、元輔、大中臣能宣、安法法師らが、貫之の息子である紀時文から『貫之集』を借覧し、その感動で歌を詠んだことでも知られる。元輔が『拾遺集』42 番歌において、当該『古今集』58 番歌の貫之詠の影響を受けた可能性はあるように思われる。

59 歌たてまつれと仰せられし時によみてたてまつれる
桜花さきにけらしもあしひききの山の峽より見ゆるしら雲

【校異】

詞 ○おほせられし時に——おほせられし時（筋元私）

○たてまつれる——たてまつりけ（天）、たてまつりける（雅）
歌 ○さきにけらしも——さきにけらしな（筋元天伏右伊相為私嘉俗）、さきにけらしな（真）

【他出】

(1) 『新撰和歌』第一 39

（春 秋 并百二十首Ⅱ 1）

さくらばなさきにけらしな足引の山のかひより見ゆる白雲

(2) 『古今和歌六帖』第六 山ざくら 4221

（山ざくらⅡ 4220）

つらゆき

さくらばなさきにけらしなあしひきのやまのかひよりみゆるしら雲

(3) 『拾玉集』第三 詠百首和歌 以古今為其題目 3480

桜ばなまだ見ぬさきもみよしの山のかひより見ゆるしら雲

(4) 『古来風体抄』下 古今和歌集 233

貫之

桜花咲きにけらしもあしびきの山のかひより見ゆる白雲

- (5) 『西行上人談抄』 2
桜花開きにけらしな足引の山のかひよりみゆる白雲
(6) 『詠歌大概』 6
さくら花さきにけらしもあしびきの山のかひよりみゆるしら雲
(7) 『竹園抄』 13・18
対詞事

桜花咲きにけらしな吹く風もにほへる方になびく白雲
(8) 『愚見抄』 6

貫之

さくら花開きにけらしな足引の山のかひよりみゆるしら雲

(9) 『悦目抄』 94

桜花咲きにけらしも足引の山のかひより見ゆる白雲

(10) 『定家八代抄』 94

歌奉りける時

紀貫之

桜花咲きにけらしも足引の山のかひよりみゆるしら雲

(11) 『和歌知頭集』(島原松平文庫本) 1

さくらばなさきにけらしなあし引の山のかひよりみるしらゆき

【校訂】ナシ

【語釈】

○歌たてまつれと仰せられし時に——「歌たてまつれ」は天皇の勅命があったことを指し、歌を詠んで献上せよ、の意。同様の詞書が22・25・342番歌詞書に見られる。他の撰者の歌はなく、全て貫之の詠歌である。「片桐全評釈」は、主語の省略された「仰せられし」に体験過去の助動詞「き」が用いられていることに着目し、『古今集』撰集の醍醐天皇が撰者貫之に命じた際の歌であることを指摘する。なお付言すると、『後撰和歌集』においては、「延喜御時、歌めしけるにたてまつりける」(18詞書)、「延喜御時に、秋歌めしければたてまつりける」(271詞書)、「延喜御時、秋歌めしければたてまつりける」(337詞書)、「延喜御時、秋歌めしありければたてまつりける」(434詞書)に、やはり主語を省略された形で、歌を召した旨の詞書が残る。こちらは伝聞過去の「けり」が用いられ、この四首も全て貫之の歌。醍醐天皇の治世下における歌人貫之の特別な立場を示す傾向といえる。

○桜花——当該歌で用いられる「さくらばな」は『万葉集』以後多く詠まれた。それに対し、辞書などでは同様の意味を持つとされる「はなざくら」は、平安中期以降に用例が増える歌語。「桜花」が早く『凌雲集』において漢詩に詠まれていることを鑑みると、「さくらばな」は元々漢詩的発想の元に上代に詠まれるようになった語であることにたいし、「はなざくら」は花の桜が賞美された平安以降に生まれた語である可能性がある。なお付言すると、上代において最も賞美された花は「梅」であった。

○さきにけらしも——「さきにけらしも」の「けらし」は、「けるらし」の縮約で、過去の推定を示す。「も」は詠嘆の終助詞。咲いただろうか、の意。二句切れとなる。

○あしひきの——「あしひきの」は「山」を導く枕詞。『万葉集』から多く用いられるが、語源・意味などは不明とされ、歌論書などでも諸説ある。「竹岡全評釈」は「山」の枕詞ながら、この歌では、いかにも裾を長く引いた山の姿が思い浮べられるような効果的な置き方になっている」と、「あしひきの」の語が響くかのような注を付ける。

○山の峽より——「山の峽」の「峽」は、山と山の間、山間のこと。『貫之集』132番歌に「山のかひたな引わたる白雲はとをき桜のみゆるなりけり」の歌があり、山の峽に見える白雲を、桜に喩える例が見られる。なお、「なげきをばこりのみつみてあしひきの山のかひなくなりぬべらなり」(『古今集』巻十九雑体¹⁰⁵⁷ 読人不知)のように、山の「峽」は「かひなし(甲斐無し)」との掛詞として詠まれることがあるが、ここでは山の「峽」の意味のみである。

○見ゆるしら雲——「しら雲」は漢語「白雲」が和語となったもの。「仮名序」に「春の朝吉野の山の桜は、人麿が心には雲かとのみなむおぼえける」とあるとおり、桜を雲に、雲を桜に見立てる例は多い。ここでは、白雲が見えることから、それに類する桜も咲いているだろうと推測する。なお、雲はほかにも滝、雪などに見立てられることもある。

【通釈】

(醍醐天皇が)「歌を(詠んで)献上せよ」とおっしゃったときに、詠んで献上した(歌)。

桜花が咲いたのだろうか。(あしひきの)山の狭間から、白雲が見えるから。

【参考】

○配列——桜の歌が続く箇所であり、言葉の上でのつながりはさほど明確ではない。しかし、とくに58〜60にかけては山の桜が最後に詠まれる箇所である。この後、桜が散ることを詠む歌群に移っていくことになる。

平安時代においても、一般に山の桜は遅く咲くことが知られ、『源氏物語』若紫巻冒頭近くには、「三月の晦日なれば、京の花ざかりはみな過ぎにけり。山の桜はまださかりにて、入りもておはするままに……」(新潮日本古典集成『源氏物語』183)との描写も見られるので、桜の盛りの時期が遅いことを反映し、後の方に配列したものととも考えられる。

◆主要参考文献

【注釈書類】

- 西下経一『古今和歌集』(日本古典全書)朝日新聞社・一九四八年
佐伯梅友『古今和歌集』(日本古典文学大系)岩波書店・一九五八年
窪田空穂『古今和歌集評釈』角川書店・一九六五年
松田武夫『新釈古今和歌集』風間書房・一九六八年
小沢正夫『古今和歌集』(日本古典文学全集)小学館・一九七一年
奥村恒哉『古今和歌集』(新潮日本古典集成)新潮社・一九七八年
竹岡正夫『古今和歌集全評釈古注七種集成』補訂版、右文書院・一九八一年
小島憲之他『古今和歌集』(新日本古典文学大系)岩波書店・一九八九年
小沢正夫他『古今和歌集』(新編日本古典文学全集)小学館・一九九四年
片桐洋一『古今和歌集全評釈』講談社・一九九八年
高田祐彦『新版古今和歌集』角川書店・二〇〇九年
小町谷照彦『古今和歌集』筑摩書房・二〇一〇年

【校合・校異】

西下経一他『古今集校本』新装ワイド版、笠間書院・二〇〇七年

【辞書類】

- 中田祝夫他『小学館古語大辞典』コンパクト版、小学館・一九九四年
久保田淳他『歌ことば歌枕大辞典』角川書店・一九九九年
日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典』第二版、小学館・二〇〇〇年〜二〇〇二年